

令和 2 年 6 月 9 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02165

研究課題名（和文）西洋十三世紀の哲学的徳論

研究課題名（英文）Virtue Ethics in 13th Century Europe

研究代表者

周藤 多紀（SUTO, Taki）

京都大学・文学研究科・准教授

研究者番号：50571733

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：未公開の写本資料にとどまっていた、十三世紀後半のオックスフォードの思想家ディンスデールのヨハネスの『倫理学問題集』の第二巻、五巻、十巻について校訂版を作成し、あわせて英語で研究論文を執筆した。第五巻と十巻の校訂版と研究論文については、オンラインアクセスも可能な雑誌に投稿し、すでに掲載された。併行して、ヨハネスが主要な思想的源泉としているトマス・アクィナスが徳をどのように定義し、徳をどのように区別・分類しているかについて研究を進めた。ヨハネス及びトマス・アクィナスに関する研究成果について研究会及び招待講演において発表し、講演原稿に修正・加筆を加えたものを出版した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

校訂作業がなされていなかった貴重な文献（ディンスデールのヨハネスの『倫理学注解』）を校訂版にすることで、またその文献について研究論文を出版することで、研究がすすんでいなかった十三世紀後半のイングランドにおける倫理学の展開の解明に貢献した。また、同時代に大陸で書かれた倫理学注解書（トマス・アクィナス、アルベルトゥス・マグヌス、パリ大学学芸学部教師による）との比較研究をすすめて、中世ヨーロッパにおける思想上の交流の一端を明らかにした。結果として、ヨハネスの『倫理学注解』が、急進的なアリストテレス主義者の台頭と弾圧が生じた、1277年前後のパリの思想状況を解明する手がかりにもなりうることを示した。

研究成果の概要（英文）：I edited John of Dinsdale's commentary on Books Two, Five and Ten of the Nicomachean Ethics written in the Faculty of Arts at the University of Oxford in the late 13th century. I also surveyed philosophical and historical features of this commentary concerning these three Books. I published editions of Book Five and Ten (in Latin) with introductions (in English) in journals that are accessible online. I also analyzed Thomas Aquinas's definition and classification of virtues, which have much influence on John of Dinsdale. I wrote an article on Aquinas's classification of virtues in Japanese and published it in a journal.

研究分野：西洋中世哲学史

キーワード：注解 アリストテレス 倫理学 徳論

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

私は平成 24 年からウスター司教座聖堂図書館所蔵の写本 (Q.13) に含まれる『ニコマコス倫理学』の注解書 (以下で『ウスター倫理学注解』と呼ぶ) の書写・校定の作業を開始し、内容の分析を行ってきた。『ウスター倫理学注解』は、先行研究で言及されたことすらない、著者不明の『ニコマコス倫理学注解』であったが、写本の筆記者の経歴や注解のスタイル・内容から、十三世紀後半に、おそらくオックスフォード大学学芸学部で書かれた作品だと推定される。私は、『ウスター倫理学注解』の研究を通して、十三世紀の『ニコマコス倫理学』注解の多くが未だ公開されていないこと、とりわけオックスフォード大学学芸学部で書かれた『ニコマコス倫理学』注解の校訂と研究がまったくすすんでいないことを知った。したがって平成 26 年から、十三世紀後半にオックスフォード大学学芸学部で書かれたことが確かな唯一の『ニコマコス倫理学』の注解である、ディンスデールのヨハネスの『倫理学問題集』の校訂版の作成と研究に着手した。そして平成 29 年には、同書第一巻の注解の校訂版の作成を終えた。本研究は引き続き同書の第二巻の注解の校訂作業と研究をすすめることで、ほとんど知られていない十三世紀後半のイングランドでの哲学的倫理学・徳論の展開を解明することを目指した。

### 2. 研究の目的

十三世紀、大学制度の確立とアリストテレスの著作及びギリシア語・アラビア語で書かれたアリストテレス注解書の翻訳の普及によって、西洋の知のあり方は大きく変化した。本研究は、哲学的倫理学・徳論にかんして、その変容を解明することを目的としていた。なかでも、まだよく知られていない十三世紀後半のイングランドでの哲学的倫理学・徳論の展開を解明することを目的としていた。

具体的には、十三世紀にアリストテレスの『ニコマコス倫理学』がどのように受容されたかを、当時書かれた同書の注解書をもとに明らかにすることを計画した。とりわけ、写本でしか読むことができず、ほとんど研究されてこなかったディンスデールのヨハネスの『ニコマコス倫理学』注解書に焦点をあて、注解書の第二巻の校訂版を作成して、その内容を明らかにすることを目指した。

### 3. 研究の方法

(1) 西洋で十三世紀に生じた徳論の変化の特徴を理解するために、西洋十二世紀の徳論にかんする理解を二次文献と原典をもとに深めた。

(2) 校訂・出版されている十三世紀から十四世紀初頭に書かれた『ニコマコス倫理学』の注解書 (アルベルトゥス・マグヌスの『倫理学注解』、トマス・アキナスの『倫理学注解』、無名のパリ大学学芸学部教師 (ms. BnF lat. 14698) の『倫理学問題集』、オーヴェルニュのペトルスの『倫理学問題集』及びラドルフ・プリトの『倫理学問題集』) の第二・五・十巻の部分を読解・分析し、各注解者が徳について、また徳と幸福の関係についてどのように捉えていたかを考察した。

(3) 校定されているテキストだけではなく、未公開資料 (写本) を読解し、ディンスデールのヨハネスの『倫理学問題集』については校定版を作成した。並行して研究論文を執筆した。

第五巻と第十巻については、現存する唯一の写本 (オックスフォード) の画像に基づいてテキストの書写を行った。第二巻については、現存する三つの写本 (ケンブリッジ、オックスフォード、ダラム) の画像に基づいて、テキストの書写を行い、内容を比較して、ケンブリッジ写本が最も信頼性が高いと判断した。ケンブリッジ写本は、不注意によって書写していないと思われる箇所や (おそらく故意に) 省略している箇所があり、文法的な誤りも散見されるが、三つの写本の中で最も修正・削除の必要が少ない。オックスフォード写本は、ケンブリッジ写本とダラム写本のどちらにも似ているが、全体としてはケンブリッジ写本により似ている。不要な追加も多く、ケンブリッジ写本とダラム写本よりも後に書かれたと推測される。同作品について最も古い写本とされてきたダラム写本は、文単位での省略がかなり頻繁に見られる。また省略記号が多用されており、基本的な読みを確定するのに適当ではない。以上のような理由から、ケンブリッジ写本を基本テキストとし、オックスフォード写本とダラム写本のテキストを補足的に用いて校訂版テキストを作成した。校訂版の方針決定と写本の選択については、数々の校定版作成の経験を持つ John Magee 教授 (トロント大学) に助言を受けた。

現存する三つの写本 (ダラム、ケンブリッジ、オックスフォード) を現地調査した。入手したマイクロフィルムの画像では読みとることができない部分の読みを確定した。また、画像では確認することができない巻本全体の構造を観察した。

『倫理学問題集』を執筆するにあたって、ディンスデールのヨハネスが典拠とした資料を明らかにした。同書の中で典拠とされている、アリストテレスやアヴェロエス、キケロやボエティウスの作品の箇所を調査して明らかにした。また (2) の作業を通して、典拠として挙げられてはいないが、同書が、トマス・アキナスの『倫理学注解』と『神学大全』をかなり参考にしていること、そして部分的には、アルベルトゥス・マグヌスの『倫理学注解』やパリ大学学芸学部教師による『倫理学問題集』での議論も取り入れていることを明らかにした。以上の

ように解明された典拠を校訂版の引用・典拠注 (locus fontium) にまとめた。

写本の状態と、著者と著作年代の推定、哲学的内容の特徴をまとめた解説を英文で執筆した。

#### 4. 研究成果

(1) 未公開資料(写本)であった、ディンスデールのヨハネスの『倫理学問題集』の第二・五・十巻の校定版を作成した。並行して研究論文を執筆した。とりわけ同時代にパリ大学学芸学部教師によって書かれた注解との類似について具体的な事例を取り出して分析し、1277年の急進的アリストテレス主義に対する断罪時に失われた資料を、ヨハネスの『倫理学問題集』が部分的に保存している可能性があることを明らかにした。したがって、ヨハネスの『倫理学問題集』の校訂・研究は、13世紀後半のアリストテレス倫理学の受容に関して、イングランドに限らずフランスでのあり方を解明する手がかりにもなりうる。

アリストテレスが正義について論じている『ニコマコス倫理学』第五巻の注解を校訂した。写本(巻本)の状態から、四巻の最後と五巻の冒頭の注解部分にあたる二葉が喪失していることを明らかにした。五巻の注解については、ヨハネスの作品であるとの証言はないが、スタイル・内容から、ヨハネスの作品と見なすのに問題がないことを明らかにした。しかし最後に書かれている問題については、筆跡と内容の相違から、同一作品に属するとは考えられないと結論づけた。内容面についていえば、ヨハネスの問題設定やアリストテレス解釈に最も大きな影響を与えたのは、トマス・アキナスの『神学大全』第二部であるが、とりわけ『神学大全』で論じられていない問題に関しては、トマスの『ニコマコス倫理学注解』に依拠していることを明らかにした。また、トマスの『神学大全』に見られない「貨幣の必要性」に関する議論は、内容の類似性から、同時代にパリ大学学芸学部で書かれた注解に依拠している可能性がきわめて高いことを示した。五巻の注解を見る限り、ヨハネスは独創的な思想家とは言えないが、倫理思想上の、当時の最新の重要な問題と概念的枠組を把握し、紹介する能力がある人物であったと結論づけた。以上の考察結果を英語論文に書き、校訂版とあわせて『中世哲学研究』に発表した。

アリストテレスが快樂と幸福について論じている『ニコマコス倫理学』第十巻の注解を校訂した。十巻の注解についても、ヨハネスの作品であるとの証言はないが、スタイル・内容から、ヨハネスの作品であると見なすのが妥当であることを明らかにした。しかし最後に書かれている「諸徳の連結」についての問題は、筆跡と内容の相違から、同一作品に属するとは考えられないと結論づけた。いくつかの問題の解答において、トマス・アキナスの『神学大全』での論旨と相違することを明らかにした。このうちのいくつかについては、トマスの説明がかなり複雑であることから、ヨハネスが簡略化した、あるいは記録者が誤解した可能性があることを指摘した。しかし、観想的生と実践的生との比較を論じた問題においては、ヨハネスがおそらく意図的に(トマスよりも)観想的生の優位性と実践的生の空しさを強調していると指摘した。以上の考察結果を英文でまとめ、校訂版とあわせて *Cahiers de l'Institut du Moyen-Âge grec et latin* に投稿、出版した。

アリストテレスが徳一般について論じている『ニコマコス倫理学』第二巻の注解を校訂した。現存する三つの写本(ケンブリッジ、オックスフォード、ダラム)の内容を比較して、各写本の信頼性と写本間の関係について明らかにした。ケンブリッジ写本は省略が最も少なく信頼性が高いこと、ダラム写本は省略が多いことを明らかにし、ケンブリッジ写本を基本テキストとし、オックスフォード写本とダラム写本のテキストを補足的に用いて校訂版テキストを作成した。内容に関していえば、トマスが『神学大全』の複数の問題で論じている内容をヨハネスが組み合わせる議論を組み立てている箇所があることを明らかにした。また、トマスの議論を組み合わせるだけでなく、トマスの議論に、パリ大学学芸学部教師が用いている枠組を組み合わせる議論を構成している箇所があることを指摘した。またいくつかの問題ではトマスと異なる主張をしており、そのうちの一つは実体形相に関する見解の相違(トマスは実体形相唯一説、ヨハネスは実体形相複数説)に由来する可能性を指摘して、ヨハネスが単なるトマスの追従者ではないことを明らかにした。以上の考察結果を英文でまとめ、校訂版とともに *Recherches de Théologie et Philosophie Médiévales* に投稿した。

(2) ディンスデールのヨハネスの主要な思想的源泉であるトマス・アキナスが、徳をどのように定義し、分類・区別しているかを明らかにした。トマス・アキナスは、他の中世の思想家と同様、思慮、正義、勇気、節制の四つを「枢要徳」と呼び、他の徳は枢要徳に基礎づけられているとしている。枢要徳は、「構成的部分」「主語的・下位の部分」「能力的部分」をもつ。「構成的部分」は徳の構成要素にあたり、徳の種にあたるのは「主語的・下位の部分」「能力的部分」である。枢要徳と枢要徳の「主語的・下位の部分」との関係が類種関係にあるのに対し(たとえば正義と分配的・交換的正義)、枢要徳と枢要徳の「能力的部分」との関係は類種関係ではない。類種関係ではない、その関係とはいったいどのようなものかを解明しようと試みた。そして、その関係を理解するためのキーワードの一つが「様態(modus)」であることを明らかにした。枢要徳の能力的部分は、枢要徳の様態を分有する、ないしは枢要徳と様態において合致するものであ

る。さらに、「様態」を用いたトマスの説明を批判的に考察し、その説明が我々の直感と日常言語の使用にかなっている側面をもつが、哲学的難点を含んでいることを指摘した。以上の成果について京都哲学会講演会において講演し、論文を『哲学研究』に公表した。

(3) 執筆依頼を受けて、西洋中世の注解書のスタイルとギリシア哲学の継承について一般向けの新書シリーズ(『世界哲学史』ちくま新書)に寄稿した。注解の構成要素の一つである「区分」を、トマス・アキナスの『倫理学注解』を例にあげて説明した。また注解が、単なる過去の文書の解説にとどまらない、創造的な営みであることを、ラドルフス・ブリトの『倫理学注解』における貨幣の必要性の議論を紹介して説明した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 周藤 多紀	4. 巻 604
2. 論文標題 トマス・アキナスによる徳の分類	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 哲学研究	6. 最初と最後の頁 23-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Taki Suto	4. 巻 88
2. 論文標題 Johannes de Dinsdale, Quaestiones super Decimum Librum Ethicorum, An Edition with an introduction.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Cahiers de l'Institut du Moyen-age grec et latin	6. 最初と最後の頁 56-134
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Taki Suto	4. 巻 36
2. 論文標題 Johannes de Dinsdale, Quaestiones Librum Quintum Ethicorum, An Edition with an introduction	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 中世哲学研究（Veritas）	6. 最初と最後の頁 42-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 周藤 多紀
2. 発表標題 トマス・アキナスによる徳の分類－枢要徳を軸にして－
3. 学会等名 京都哲学会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 周藤 多紀
2. 発表標題 デインスデールのヨハネスによる徳の区分論
3. 学会等名 第3回正義論研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 周藤 多紀
2. 発表標題 デインスデールのヨハネスの『倫理学問題集』第五巻 (ms. Oriel 33)
3. 学会等名 第2回正義論研究会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 周藤 多紀 ほか	4. 発行年 2020年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 261
3. 書名 世界哲学史 3	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----